様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

平成 ３０ 年　 ６ 月 ２０ 日現在

機関番号：３０１１０
研究種目：基盤研究(C)（一般）
研究期間：2013～2017
課題番号：２５３８０７５９

研究課題名（和文）ソーシャルワーク演習プログラムの開発－自己観察を促す方法としての当事者研究の活用

研究課題名（英文）Development of social work practicum program - Using Tojishya Kenkyu (Self-Directed Research) to promote self-observation

研究代表者
佐藤　園美（SATO, Sonomi）

北海道医療大学・看護福祉学部・准教授

研究者番号：１０３８７４１７

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　3,900,000円

研究成果の概要（和文）：　当事者研究の実践者(精神障害者)へのインタビュー調査から、精神障害者は当事者研究を行うことで自己観察と自己変革の循環を繰り返しながら、当事者自身が抱える課題に対処する能力を高めていることが明らかになった。
この研究を踏まえ平成26年～平成27年度にかけて対象学生(23人)に当事者研究を取り入れた演習プログラムを実施し、授業の前後と実習後に学生が書いたセルフレポートを比較分析した。結果、学生は当事者研究を行うことで自分と環境（利用者を含）の間で何が起こっているのかに気づき、自分自身の理解を深めていることが分かった。以上から当時者研究が学生の自己理解を促す方法として有効であることが推測された。

研究成果の概要（英文）：An interview survey on mentally disable people who were practicing Tojishya Kenkyu was conducted. It revealed that those mentally disable people were gaining the ability to cope with the problems through repeated practice (circulation) of self-observation and self-transformation. Based on this research, we conducted a practicum program incorporating with Tojishya Kenkyu for target students (23 people) from FY2004 to FY2007, and compared self-reports written by the students before and after the practicum classes and their filed instruction practice.
As a result, by doing Tojishya Kenkyu, the students realized what was going on among themselves, and deepened the understanding of the relationship between the environment they lived in and themselves (including the clients). From this research, it was speculated that Tojishya Kenkyu was effective as a method to encourage students' self - understanding.

研究分野：精神保健福祉

キーワード：当事者研究　ソーシャルワーク演習　自己理解　自己観察

１．研究開始当初の背景

(1) ソーシャルワークにおいて“self-awareness”（自己覚知）は 1930 年代に注目され、1950 年代以降様々な研究論文に取り上げられている（Perlman、 1957、Biestek、 1957）。日本ではケースワーク理論の紹介、導入がなされた頃から、利用者の問題解決援助とワーカーの専門的成長に欠かせないものとして重要視されてきた。川村（2003）は自己覚知すべき内容として、援助者自身の心理、行動の特異性、価値観、感情などをあげている。確かに自己覚知をすることで利用者が抱える問題に対して援助者側が感情的な反応を示すのを防ぐことができる（逆転移防止）。しかしソーシャルワークが利用者の問題に焦点を当て、問題解決を指向していたものから、利用者の能力や目標に焦点を当てた未来志向型に変わりつつある現在、ソーシャルワーカーに求められる自己理解とは、単に自分の偏見や価値観等を知ることだけではない。自分自身を媒体として利用者を援助するソーシャルワーカーは、利用者の能力や目標に焦点を当てた支援を行うため、自分と環境（利用者を含む）との関係性を客観的に理解し、その関係性（自分と利用者の相互作用等）を分析できる力（自己観察）が必要である。しかし、単に自分自身について考えれば自分が理解できるわけではない。そこで、何をどのように考えれば、自分自身について真に理解できるのかの方法論が必要であると考えた。

(2)当事者研究とは、統合失調症などを持ちながら地域で暮らす当事者の生活経験から生まれた自助（自分を助け、励まし、活かす）プログラムであり、出来事や苦労のおきるパターンやしくみ、抱える苦労や困難の背後にある意味や可能性を見出すことを重視している（向谷地 2011）。当事者研究を学生が行うことで、学生自身に現在起きている事象（人と上手く関係が築けない、人に対して No と言えないなど）に焦点をあて、そのパターンやしくみ（環境との関係性）を吟味し、出来事に対しての自分の態度やとらえ方等を知ることができる。当事者研究を用いることによって、学生が自己観察（自己理解）の方法を身につけ、その力を促進することができるのではないかと考えた。

２．研究の目的

ソーシャルワーカーと利用者との専門的援助関係の形成において必要な自己理解とは、従来重要視されてきた自己覚知ではなく、自分と自分を取り巻く環境との関係性について目を向ける自己観察（自己理解）である。本研究の目的は、自己観察（自己理解）の方法としての当事者研究の有効性について検証し、新たな演習プログラムを開発することである。

３．研究の方法

上記の目的を達成するために、２つの調査研究を行った。

⑴自己観察（自己理解）の方法として当事者研究が有効であるかの検討をするため、当事者研究を行っている経験者（精神障害者）9 人に対して、「当事者研究による自己変化について」のフォーカスグループインタビューを行い、質的・記述的に分析した。

⑵ 平成 26 年度～平成 27 年度にかけて対象学生（精神保健福祉コース 23 名）に当事者研究を取り入れた演習プログラムを実施した。学生は段階的に当事者研究について学び、最終的には６～７名のグループに分かれ、学生自身の当事者研究を行った。各グループには教員と当事者研究の経験者がファシリテーターとして参加した。演習プログラムの実施前後（平成 26 年 5 月、平成 27 年 1 月）と精神保健福祉援助実習

終了後（平成 27 年 7 月）計 3 回、学生に書かせたセルフレポート「ソーシャルワーカーになるということ」をテキストマイニングソフトウエアによって分析した。分析用ソフトは KH Cord Ver.2.00f を使用した。

４．研究成果

(1) インタビュー結果を分析することにより、当事者研究を行うことによる自己変化のカテゴリーとして「仲間との出会い」「自分への気づき」「経験の有意味性」「つながり（自分と他者）の回復」「生きやすくなる」「自分を助ける方法」の６つが明らかとなり、6 つのカテゴリーのダイナミズムとして、２つの循環「経験の有意味性の循環」「生きやすさの循環」があることが分かった。

「経験の有意味性の循環」は、当事者研究を始めることで仲間から言葉と力をもらい、自分の言葉を取り戻すことで（「仲間との出会い」）「自分への気づき」が起こり、そこから自分の経験することには全て意味がある（「経験の有意味性」）と理解し、「自分を助ける方法」として当事者研究が定着するという循環であった。また、「生きやすさの循環」は「仲間との出会い」から始まり、他者や自分との「つながりの回復」が生じ、現実は変わらないが、一緒に笑ったり気持ちが暖かくなるなど、「生きやすくなる」ので、「自分を助ける方法」として当事者研究が定着するという循環であった（図１）。

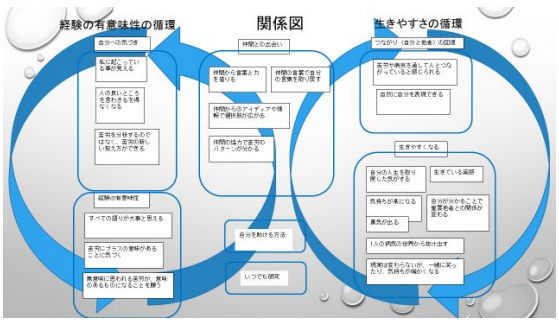

図１ 自己変革の関係図

向谷地は体験的に、当事者研究を行うことで当事者は、自己観察と自己変革が起こりやすい内的・外的環境を整えることができると考えていた。今回のフォーカスグループインタビューで明らかになった「経験の有意味性の循環」と「生きやすさの循環」は、まさに向谷地が考えていた自己観察と自己変革の循環を表していると言える。つまり今回の調査から、当事者は当事者研究を行うことで、自己観察と自己変革の循環を繰り返しながら、当事者自身が抱える課題に対処する能力を高めていることが明らかとなった。

一方、支援者が目の前の当事者を支援しようと関わる時、支援者は当事者にとって重要な外的環境の一部となる。支援が当事者と支援者の協働関係を通して行われるものである以上、当事者だけでなく、支援者が自身の内的・外的環境を理解し分析する力、自己観察力を身につけ、当事者の課題に対応できるよう自己変革していくことが重要であると考えられる（図２）。

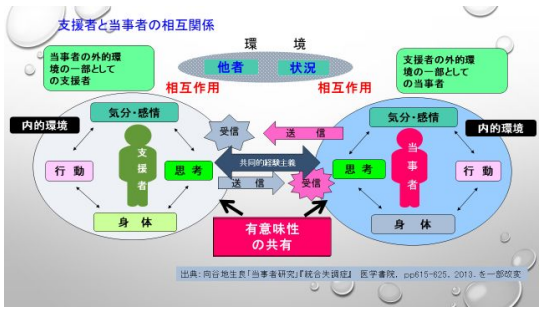

図２ 支援者と当事者の相互関係

今回の調査で明らかとなった、当事者に起こっていた自己観察と自己変革の循環は、支援者側にも求められるものであり、学生がそれらをソーシャルワーク実習教育において実践的に学ぶ方法として、当事者研究が有効であると推測された。

(2) 演習プログラムの実施前後（平成 26 年 5 月、平成 27 年 1 月）と精神保健福祉援助実習終了後（平成 27 年 7 月）計 3 回のセルフレポートの記述内容をすべてテキストにした結果、総抽出語数 72,325 語、異なり語数 3,227 語が抽出された。各時期の傾向を探るため、①3 回それぞれの時期

について、10 回以上の頻出語を用いて共起ネットワークを作成し、②20 回以上出現する頻出語を用いて 3 つの時期を外部変数とし対応分析を行った。

①1 回目の当事者研究を行う前(2014 年 5 月)には媒介中心性が高い語として「不安」「感じる」「問題」「ソーシャルワーカー」が検出された。2 回目の当事者研究を行った後(2015 年 1 月）は媒介中心性が高い語として「感じる」「自分」「考える」「実習」が検出された。そして 3 回目実習終了後（2015 年 7 月）には同じく「感じる」「自分」「今」「思う」が媒介中心性の高い語として検出された。このうち 1 回目に媒介中新世が高い語として検出された、「不安」に着目し、学生が「不安」と言う語をどのように用いているかテキストに戻って確認したところ、学生はソーシャルワーカーになることへの漠然とした不安、精神保健福祉を学んで行くことへの不安を抱えていることが分かった。さらに当事者研究後、実習終了後に媒介中心性の高い言葉として検出された「自分」に着目して、関連が強い語をリストアップし、それぞれの時期での共起ネットワークを作成した。1 回目には「考える」「問題」「不安」が、共起関係が強い語として検出されたのに対し、2 回目は「気持ち」「必要」「理解」が、3 回目には「気持ち」「知る」「理解」の共起の程度が強い。つまり当事者研究を始める前の学生は、ソーシャルワーカーになることや精神保健福祉を学ぶことへの不安を語っていたが、当事者研究を学び体験することで、自分自身の気持ちに気づき、その意味を理解することの必要性を学んだのではないか。そして実習で様々な体験をする中で、それを実感することができたと推測できる。

②寄与率の高い成分 1 の位置関係に注目すると 2 回目（当事者研究を行った後）と 3 回目（実習後）が近く、1 回目（当事者研究を行う前）が離れた場所になっている。また、対応分析では「距離」「場面」「苦労」が実習後の時期を特徴づける言葉としてプロットされた（図３）。

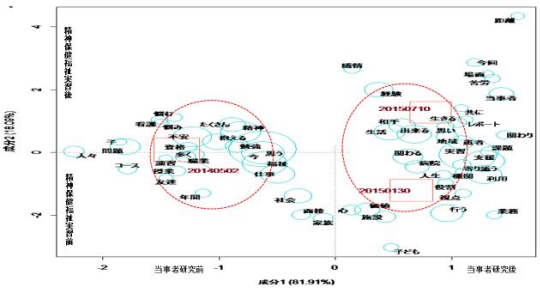

図３　対応分析

このうち「苦労」の出現回数を見たところ、1 回目は 1 回しかなかったが、2 回は 7 回、3 回目は 24 回となっていた。さらに学生がどのように「苦労」という言葉を用いているのかテキストに戻って確認した。学生は利用者の「苦労」についても語ると同時に、自分自身の「苦労」について着目していることが分かった。べてるのスローガンに「苦労を取り戻す」という言葉があるように、当事者研究では 「苦労＝宝」と捉え、「苦労」は当事者研究用語の一つである。ここで言う「苦労」は単なる「悩み」「問題」とは違い、「可能性」「価値」を含んだ言葉である。学生は当事者研究を学ぶ中でこの「苦労」という言葉に出会い、利用者の「苦労」だけではなく、自分自身の「苦労」についても語るようになった。これはまさしく、学生が当事者研究を体験することで起こってきた変化だと考えられる。

これらの結果から、学生は当事者研究を用いた演習プログラムを受講することで、自分自身について知ることの大切さを理解し、実習を通して自分の「苦労」と向き合い「自分」を見つめることができるようになったのではないかと考えられる。

これらの研究結果より、ソーシャルワーク演習プログラムに当事者研究を用いることによって、学生は自己観察（自己理解）の方法を身につけ、その力をさらに深めることができるようになると考えられる。

当事者研究を行うことで、具体的に学生にどのような変化が起こっているのか。現在それを明らかにするため、当事者研究を行った学生２名に焦点を当て研究を行っている。

５．主な発表論文等
（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計８件）
① 向谷地生良、当事者研究とソーシャルワーク、臨床心理学　増刊、査読無、9巻、2017、36-41
② 向谷地生良、当事者研究の可能性、佼成カウンセリング、査読無、52巻、2016、7-62
③ 向谷地生良、伊藤知之、自助活動としての当事者研究の可能性―浦河べてるの家の取り組みから、精神科、査読無、第26巻第3号、2015、229-232
④ 佐藤園美、学生の肯定的な精神障害者観育成のための教育プログラム、北海道医療大学看護福祉学部紀要、査読無、21巻、2014、59-66
https://hsuh.repo.nii.ac.jp/

〔学会発表〕（計10件）
① Okuda、K.、 Mukaiyachi、I.、 Sato、S.、 Yokoyama、T.、 Method of enhancing student’s self-understanding possibility of Tojishya Kenkyu.、SWSD18 Social Work Education and Social Development、 4～7/7/2018、 Dublin.
② 佐藤園美、向谷地生良、奥田かおり、精神保健福祉援助演習プログラムの開発―学生の自己理解を促す方法としての当事者研究の可能性、日本精神保健福祉学会学術研究集会、2016年6月24日、沖縄大学
③ Sato、S.、 Mukaiyachi、I.、 Okuda、K.、 Yokoyama、T.、 How can Tojishya Kenkyu for better understanding of self.、Joint World Conference on Social Work Education and Social Development、 9～12/7/2014、 Melbourne.

〔図書〕（計３件）
① 向谷地生良、東京大学出版、「第７章当事者研究と精神医学のこれから」、石原孝二、河野哲也、向谷地生良編、『精神医学と当事者』、2016、180-205（総頁数272）
② 向谷地生良、医学書院、「第 61 章当事者研究」、福田正人、糸川昌成、村井俊哉、笠井清澄編、『統合失調症』、2013、615-625（総頁数768）

〔その他〕
① 佐藤園美、向谷地生良、奥田かおり、オープンダイアローグ研修報告、北海道医療大学看護福祉学部紀要、査読無、24巻、2017、51-58
https://hsuh.repo.nii.ac.jp/

６．研究組織
(1)研究代表者
佐藤　園美（SATO、 Sonomi）
北海道医療大学・看護福祉学部臨床福祉学科・准教授
研究者番号：１０３８７４１７

(2)研究分担者
向谷地　生良（MUKAIYACHI、 Ikuyoshi）
北海道医療大学・看護福祉学部臨床福祉学科・教授
研究者番号： ００３６４２６６

奥田　かおり（OKUDA、 Kaori）
北海道医療大学・看護福祉学部臨床福祉学科・講師
研究者番号：４０６３２６０９